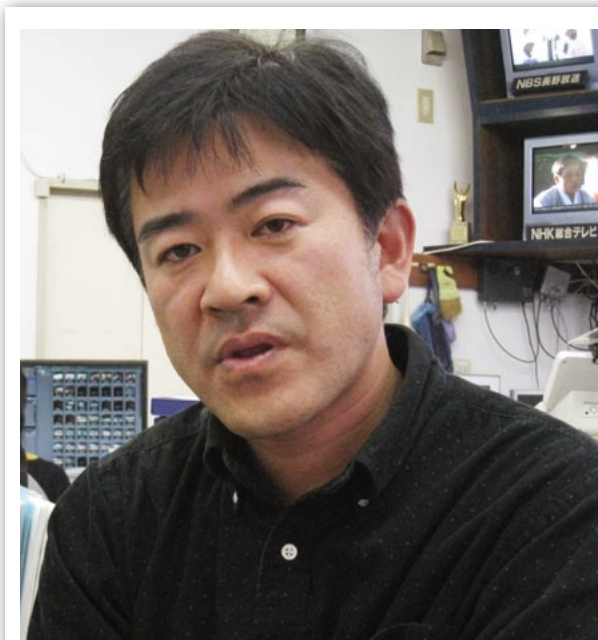


# 「“地産地消”の放送を目指せ！」

**長** 野県南部に位置する地方都市、伊那市※<sup>1</sup>。  
開局から25年目を迎える伊那ケーブルテレビジョンは地域のネタを丹念に拾い、質の高い番組を発信し続けている。

去年戦争をテーマにした『上伊那の戦争遺構シリーズ』では、ギャラクシー賞と「地方の時代」映画祭で共に選奨を受賞。ケーブルテレビ局がギャラクシー賞で入賞したのは47回の歴史のなかでも3社しかない。

地域に密着し、視聴者から信頼を勝ち得るとはどういうことなのか。伊藤秀男放送部長に話を聞いた。



## 伊藤 秀男

伊那ケーブルテレビジョン放送部長

### プロフィール

1966年生まれ。長野県伊那市にある伊那ケーブルテレビジョン放送部長。伊那市は長野県南部に位置する人口7万人の地方都市。伊那ケーブルテレビの加入世帯数は2910戸。社員数は29人。『上伊那の戦争遺構シリーズ』でケーブルテレビ局では3社目となるギャラクシー賞入賞。

### インタビューの目的

『上伊那の戦争遺構シリーズ』は、伊那に住む関係者の貴重な証言を集め、歴史の事実を記録し続けている報道です。「田舎町にも戦争があった」という身近な事実を、世代を超え語りついでいくために制作されました。

制作している伊那ケーブルテレビジョン※<sup>2</sup>は、まさに、ローカル中のローカルのケーブルテレビ局です。視聴者は伊那地域に住む、およそ7万人が対象。非常に厳しい予算のなか、わずか10人の制作スタッフが、きめ細やかに情報を集め、質の高い放送を出そうと、奔走されています。

NHKでは、なごらく「地域に根差した」「地域に密着した」サービスをするという方針が打ち出されていますが、残念ながら具体的な「あるべき姿」はまだ闇の中です。「エリア職員」の本格的な導入も決まりましたが、地域に根付き、地域の人々に必要とされる公共放送NHKとはどうあるべきなのでしょう。

地域に密着し、視聴者から厚い信頼を勝ち得てきた伊那ケーブルテレビジョン放送部長の伊藤秀男さんに話を聞きました。

### 報道は継続してこそ報道

——「ギャラクシー賞」※<sup>3</sup>と「地方の時代映像祭」※<sup>4</sup>で選奨を受賞した感想は。

ギャラクシー賞は、旧満州に渡った若者の過酷な運命や、遺族などの悲しみ、そして若者を送りだした教育者たちの証言を綴った「満蒙開拓青少年義勇軍」、地方の時代は神風特攻隊の訓練地にもなった「陸軍伊那飛行場」ということで、

「ここにもあった戦争」という目線で取り上げてきた『上伊那の戦争遺構シリーズ』での受賞でした。

どちらの賞も番組内容というよりは、戦争についての姿勢、とらえ方、そして何より、継続して取り組んできたことへの評価だと受け止めています。

実は、当初は記録的な意味合いに重きを置こうと思っていました。でも、せっかくやるなら放送しよう。それも毎日。私は報道するということは、一つのテーマがきちんと集結するまで報道することだと理解しているんですね。だから、多くの放送局が8月15日の終戦記念日や東京大空襲のあった3月11日、沖縄戦終結の6月23日などに集中して放送するのは必要だとは思いますが、それだけだと、すぐに忘れ去られてしまうと思うんですよ。

こなししていくのはきついです。スタッフは10人しかいませんから。でも、戦争はまだまだ掘り起こされていけないことがたくさんある。戦争体験者が減ってきているいま、掘り起こして伝えなければ過去の遺物として埋まってしまう。だからこそ、きめ細やかな情報網を持つ私たちケーブルテレビ※5がしんどくても継続してやっつけていかなければ



©朝日新聞社

らない仕事だと考えたんです。結果として全国に誇れる賞をいただけたことは、ケーブルテレビの存在感も示すこともできたので、大変意義深いことだと認識しています。

——いつからどのように取り組まれてきましたか。

スタートしたのは3年前です。戦後60年を超えたあたりから「証言者がいなくなるからやらなければ」という使命感は常にもっていたのですが、いざ、というときに色々あったんです。言っていることが嘘じゃないか。記憶違いもあるだろうし、裏は取れるのかっていうことで、反対意見もあったりして。

でも、始めないことには始まらないと思ったんです。

そこで、色々、凝らないで、とにかく体験を聞くスタイルにしたんです。特に戦争体験を聞くときには、サイズはバストショットに固定して、こちらが誘導的に「魅せる」ということも避けました。そしてインタビュをした人、すべてを放送にのせることにしたんです。

もちろん、まったく手を加えないわけではありません。撮っていけば、あやふやなところは分かりますから、そこはきちんと編集します。でも、逆に体験談を自信を持って言い切る人もいます。なかには、戦争が良かったとまでは言わないものの、戦争を賛美するというか、いまの平和があるのは戦争のお陰だという人もいました。でも、それは証言すべて聞いてもらおうと、腹をくくって放送に出しました。

——「すべてを放送」「凝らない」というのは斬新ですね。

一つのテーマに対して、三人くらいなら、こっちの思惑にはめ込んで、話を引き出していくことはできると思うんですけど、地域にいる方々、すべてが対象ですから、それは無理です。こっちの思惑通りに聞いても、それは聞きと

※1「長野県伊那市」人口およそ7万人。長野県の南部に位置し南アルプスと中央アルプスの山間にある自然豊かな地方都市。名産品は馬刺し、ローメン、ざざむし。

※2「伊那ケーブルテレビジョン」

資本金2億円。月額2625円の施設利用料で運営している長野県伊那地域のケーブルテレビ局。加入世帯数は26910戸。平成22年6月末現在、施設利用可能世帯数のおよそ70%となっている。社員数は29人。

※3「キャラクター賞」P47参照

※4「地方の時代映像」地域の発信や制作者の交流を目指して1980年に始まった映像祭。ドキュメンタリー、報道番組が寄せられる。放送局、一般、高校生、ケーブルテレビの4部門がある。2010年の応募総数は196作品。

※5「ケーブルテレビ」ケーブルを用いて行う有線放送の内、有線ラジオ以外のもの。広義には、これを中心としてインターネット接続や電話（固定電話）なども含む複合的なサービスを指す。総務省によると、現在、有線テレビジョン放送法の許可を受けた施設数及び事業者数はそれぞれ673施設、531事業者。自主放送を行う許可施設のケーブルテレビ加入世帯数は25330万世帯、普及率47.5%。人口およそ7万人。

るということにはならないと思うんです。色々食い違うところがあっても、その人にとってはそれが真実。すべての人から生の声を聞くことを大事にしました。

——地域限定の苦しさもあると思うのですが。

非常に狭い地域ですから、自分が何をしてきたかということ語るの、ここでずっと住んでいく限り、孫子の代まで関係します。だから、どうしても口が重くなってしまうことはあるし、なかなか口を開いてはくれないこともあります。辛い体験や苦しい体験の本質の部分まで100%語ってくれる人はなかなかいません。

それでも、「数打ちや当たる」っていうわけではないですが、「過去にこういうことをして、伝えなければいけない」という使命感を持つ人もなかにはいるわけです。戦争を知らない世代、若い世代に何らかの形で伝えていくという気概のある人がね。そういう方に出会ったときは大きいです。

### 地域にタネをまく

——全国放送だとなかなか隣人が戦争体験をしたという意識が持てない。そういう意味で放送を肌で感じられるというのは大きいのでは。

隣のおじいちゃんがしゃべっているということを感じられれば、感じ方も全然違うわけです。NHKは広く伝えるという「横」の広がりですが、私たちは「縦」、時系列のつながりを求めているんです。高齢者から若い世代へという循環を作っていくことが必要だと感じています。

地方の時代映像祭の講評で映像の「地産地消」という言葉がでしたが、まさにその通りだと思います。報道することは一種の種まきだと思うんです。

これは別の番組ですが、いまから20年前くらいにあった高校生が自ら戦争を調べるといふ活動を取り上げたことがあります。教師の指導もあるんでしょうが、問題意識というか、「ここにも戦争があったんだ」というリアル感が高校生たちを駆り立てていました。本来は私たちマスコミが、そういう情報を発信していかないと、戦争などはまったく見向きもされない事案なわけです。ですので、情報の一端でも若い人たちに伝わり、何らかの活動につなげていければ、最後は実りあるものにつながれると考えています。

——放送は民度の醸成をうながす役割も担う。

こつちの意見を押しつけるのではなく、「皆さんどう考えますか」というような議論がわき上がるようにする。そこは1つの役割です。そこまでいったらすごいですけど。地域に密着した放送というのは、そういうことまで意識して放送していかねばならないと思います。

### 地域と密着するには

——地域に密着した放送をするには。

私たちの視聴者は中高年の方が多いのですが、もつとニュースや報道に力を入れて欲しいということをよく言われます。これは、もつと、地域のニュースを知りたいと言うことの表れで、裏を返せば、そういったニュースがNHKや民放などで放送されていないということです。

たとえば、「伊那で熊が出没」というニュースは県域ではトップニュースにすることもありますが、でも、伊那においては正直、よくある話でニュースバリューがあまりない。死者でも出れば話は変わってきますが、それよりも、地域には地域のプライオリティーがあるわけで、たとえば、市

税がどのように使われているかという問題の方が、よほど関心があるわけです。

そういったニュースは、県域ニュースとして、NHKはじめ民放各局では扱いの対象にならないものが多いですが、私たちは取り上げていかなければならない。そういうことをきめ細やかに伝えていくことが、私たちの役割だと思っています。

——ケーブルテレビならではのプライオリティーもある。

お店を紹介するという企画ものをよく民放ではやられています。どこまでニュースバリューがあるかは正直分かりませんが、確かにニーズはあるかもしれません。本音を言えば店紹介はどっちでもいい。地域の人に残していくべきだ、これは伝えるべきものだ、というものを、きちんとこちらでフィルターを通して伝えるべきものを流すべきです。尖閣諸島じゃないけど、誰でも発信者になれる時代だからこそ、きちんとした感覚で事象をとらえ、報道するところが求められていると感じています。そうじゃなければマスコミの価値がない。それは地域であろうが、中央であろうが関係ないでしょう。

ただ、私たちは伊那に根差したケーブルテレビですから、伊那と周辺の人に受け入れられるコンテンツ作りはしていかなければなりません。支持を失い契約を切られてしまえば、施設利用料を源泉にしている私たちは立ちゆかなくなってしまう。でも、信頼を得るためには、コンテンツに魅力があることが絶対条件だと思います。手法はいろいろあっても、コンテンツで勝負です。あと、情報とスピード、そこは変わらないですよ。

——見てもらうための工夫はありますか。

いかに見てもらうかは、いままで以上に工夫が必要だと考えています。時間帯や中身など、編成はこれからもっとやっつけていかないといけない。たとえば、伊那市の広報番組をやっているんですけど、広報からは「日曜の20時は勘弁してね」とか言



われることがあります（笑）。そういうことは実際ありますから、NHKや民放と競合しないように、すき間隙間を縫って編成していくのは1つの手だと思います。

すき間といえは、番組自体も

そうです。うけを狙うのならバラエティー番組などをやってもいいでしょうが、ケーブルテレビ局がまねをしても制作費が潤沢にあるわけではありません。勝ち目はまずない。では、どうするかというと、私たちのメイン視聴者層は中高年なわけですから、そこにターゲットを絞り込むんです。たとえば、今年からできればいいなと考えているのは、地域の歴史を掘り起こす番組です。これは中高年にはうけが良いと思っています。

一方、裾野を広げるために、いままで同様、徹底して保育園まわりや小中学校の卒業式なども放送していくつもり

です。「今日は〇〇小学校が出るよ」とか「〇〇ちゃん、テレビに出ていたね」と話題になれば、ケーブルテレビ自体にも興味を持ってもらえると思うんです。

一方は、泥臭く、もう一方ではキラリと何かが光るようなそんなバランスですかね。なかなかうまくいきませんが……。

### NHKが地域に必要な公共放送になるために

——地域においてNHKは身近に感じられますか。

感じるのには距離感ですね。それは現場でも感じますし、放送を見て感じることもあります。

たとえば、現場レベルでいえば、なにかあったら連絡してください、情報提供してくださいってよく言われますが、正直、どこの誰に連絡していいかまでは分からない。真剣に言われていない感じがしています。もつと、お互いうまく協力できれば、より、「公共の利益」という意味では有効に働ける気がしています。報道は「抜いた」「抜かれた」ということがよく言われますが、国民に必要な情報は、そういうレベルではなく一致協力して出すことも必要なのではないでしょうか。

また、放送でいえば、あまりにも中央発信なのではないかという気がしています。クローズアップ現代などで、そのときの最大の関心事をタイムリーにやることも必要ですが、どうしても、東京発信という感じがしてしまいます。地方の話、地方発の話がバランス的にもつとあっても良い気がしますね。

そういう意味では、地域のNHKがもつと地域に入り込んで、もつと細かなこと、しかも面白いことを扱う必要があると思います。ただ、そうすると競合してしまうのでわ

れわれとすれば、ほどほどには思うのですが(笑)、でも、地域のしかも田舎にこそ宝はねむっているような気がしますし、そこには普遍的なネタもあると思います。

昔、『列島リレードキュメント』<sup>※6</sup>という番組をやっていました。あれは面白かった。地域の小さな話をリレー形式で伝えていく。地方は面白いんですよ。だから、ものによっては、全国的な一般的な関心事として、視聴者に受け入れられていたんだと思います。いまのNHKの放送は、そういう意味でバランス感覚が崩れているというか、話を大きくしすぎているという気がします。だから、もつと、ドキュメンタリーを、それも地域発のものを制作して欲しいです。

※6「列島リレードキュメント」

1993年4月～98年3月までNHK総合テレビで放送されていた。1本15分の地域発のドキュメント番組を3本リレー。若手のディレクターを中心に腕を競い制作され、事件・事象や社会問題、自然、文化、教育などの課題、地域に生きる人物など、列島各地の『いま』を伝えた。

地域に密着すると言うことは、その地域で生きていくことに他なりません。その地域で骨を埋める制作者が作る番組と、いずれ、その地を離れる制作者が作る番組では、『質感』という意味で番組に大きな差が出るのは当然でしょう。NHKでは地方から出す番組でも、とかく、これは全国放送になりそう、これはならない、などという基準で見てもまいがちです。それでは、地域に根差すことは不可能でしょうし、地域放送局に勝るコンテンツは作れないのではないのでしょうか。

振り返れば、NHKの番組の多くは地方で起きている事象を取り上げています。しかし、地域で暮らす人たちが、地方を取り上げた番組を見て、普遍性より特殊性、言い換えれば、情報に対する温度差を感じてしまうという現実を聞いたとき、改めて、地域に根差した番組作りができていくのかと内省せざるを得ませんでした。

「放送局のちから」を地域で発揮するために必要なことへのヒントは、情報を掘り起こし、いかに地域に還元できるか。そこまで考えた放送を出すことが地域密着への鍵になるのかもしれない。

報告 中央放送渉外部長 竹内哲哉